

# SMC金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain SMC 豊島 健治

## 銀行の自己資本比率 (その裏側に潜むもの)

...自己資本比率40%「全国トップ」の苦悩...  
最近、2003年3月期決算で自己資本比率が40%を超えた北海道稚内市に本店を置く稚内信金の悩みを伝えた記事を目にした。低自己資本比率対策に頭を痛める大手銀行や一部地銀には羨ましい限りの数値で、さぞかし同信金首脳部は胸を張っていると思いきや、実はその逆でその高い自己資本比率に苦悩しているという。

金融機関としては超という文字を与えても良い程高い自己資本比率は、逆に同信金が、貸出不振で融資残高が増えない、有価証券への運用依存度を高めざるを得ない、という深刻な資金運用難状況にあることを示している。低金利下、有価証券利回りは継続的に低下しており、結果的に収益力が低下していることを示している。「高い自己資本比率=低収益力」となってしまう所に現在の稚内信金の苦悩があるとすれば、金融機関経営における自己資本比率とは一体何だろうかと考えてしまう。

私達が一般に自己資本比率と云う時、それは総資本に占める自己資本の割合を指している。下図で云うと、「自己資本÷負債・資本(=総資産)」で計算される比率である。

総 資 産	流動資産	負債	負債 ・ 資本
	固定資産	自己資本	

企業経営において自己資本比率が高いということは、返済を要する負債が少なく経営の安全性が高いことを示す。平均的中小企業の自己資本比率は20%程度であり、私なども30%以上を目指すべきだと主張している。しかし、金融機関の自己資本比率は、計算の基本構造は同じでもその意味するものがどうも違うようだ。

金融機関の自己資本比率は、「(基本的自己資本+補完的自己資本+準補完的自己資本)÷リスク・アセット」という計算式で求められる。何だか意味不透明な言葉が並んでいると思われるかもしれないが、基本的な考え方自体は一般企業と同じだ。ただ、「自己資本÷負債・資本」で計算

するのではなく、自己資本にはプラス要素(劣後債等の補完的項目や準補完的項目を加算)を、総資本にはマイナス要素(リスク・アセットと云い、国債やマル保融資等リスクの低い資産を減算)を考慮して計算するようになっている点が大きく異なる。国内基準と国際基準とでは若干計算が違うが、こうして計算された比率が銀行等金融機関の自己資本比率である。だから、バランスシートから求める自己資本比率(=株主資本比率)とマスコミ等に公表される自己資本比率とはかなり数値が違っている。

ちなみに、地元3地銀の15年3月期決算におけるバランスシート上の自己資本比率と公表自己資本比率を比べてみると次の通りだ。

	B/S自己資本比率	公表自己資本比率
千葉銀行	3.99%	10.42%
千葉興業銀行	4.80%	9.60%
京葉銀行	4.39%	8.87%

(千葉銀は国際基準、他2行は国内基準)

上表のように、銀行が発表している自己資本比率は、通常一般企業が使っている自己資本比率よりかなり大きくなる。そして重要なのは、前述の複雑な計算式から導き出せるのだが、B/S上の自己資本を増やさなくとも資産構成、資産内容を変えるだけで自己資本比率を上げることが可能であるということだ。

例えば、国債のリスク・アセットは0%(そう決っている)なので、貸出金を回収して国債に振り向ければ自動的に自己資本比率が上昇する。又、住宅ローンのリスク・アセットは50%だから一般融資を増やすより住宅ローンを増やした方が自己資本比率という面では有利に働く。保証協会付き融資にも同じことが云える。

このような事情を背景に、銀行が自己資本比率を上げるために企業向け貸出金(リスク・アセット100%)残高を抑制、乃至減額しようとする姿勢・態度を一般に「貸し渋り」とか「貸し剥がし」と呼んでいる。双方とも、自己資本比率の裏側に潜む現象である。

自己資本比率が40%を超えた金融機関も苦しい。自己資本比率が低い銀行も苦しい。一体どっちが本当なんだと云いたいが、銀行の最適自己資本比率は、個別銀行が自らの経営戦略に立って決めるしかないものようだ。